

# Contents

1	初めての駅	2
2	窓際のトットちゃん	4
3	新しい学校	9
4	気に入ったわ	10
5	校長先生	12
6	お弁当	16
7	今日から学校に行く	18
8	電車の教室	21
9	授業	23
10	海のものや山のもの	26
11	よく噛めよ	30
12	散歩	31

# Chapter1 初めての駅

じゅう おか えき おおいまちせん お  
自由が丘の駅で、大井町線から降りると、ママは、トットちゃんの手を引っ張って、  
かいさつぐち で  
改札口を出ようとした。トットちゃんは、それまで、あまり電車に乗ったことがなかったから、大切に握っていた切符をあげちゃうのは、もったいないなと思った。

そこで、かいさつぐちのおじさんに、「このきっぷ、もらっちゃいけない？」と聞いた。おじさんは「ダメだよ」というと、トットちゃんの手から、きっぷとあ  
改札口の箱にいっぱい溜まっている切符をさして聞いた。「これ、ぜんぶ、おじさんの？」おじさんは、ほかでいひときっぷ  
他の出て行く人の切符をひったくりながら答えた。「おじさんのじゃないよ、えき  
駅のだから」「へーえ……」トットちゃんは、みれん  
未練がましく、はこ のぞ こ  
箱を覗き込みながら言った。「わたし おとな  
私、大人になったら、きっぷ うひと  
切符を売る人になろうと思うわ」おじさんは、はじめて、トットちゃんをチラリと見て、いった。「うちの おとこ こ えき はたら  
うちの男の子も、駅で働きたいって、いってるから、いっしょにやるといいよ」

トットちゃんは、すこ はな  
少し離れて、おじさんを見た。おじさんはふと  
肥っていて、めがね  
眼鏡をかけていて、よくみると、やさしそうなのところもあった。「ふん……」トットちゃんは、手  
を腰に当てて、かんさつ  
観察しながら言った。「おじさんとこのこ  
子と、いっしょにやってもいいけど、かんが  
考 えとくわ。あたし、これから あたら がっこう い  
新しい学校に行くんで、忙しいから」そういうと、トットちゃんは、ま  
待ってるママのところに走っていった。そして、こうさけ  
叫んだ。「わたし  
私、きっぷや  
切符屋さんになろうと思うんだ！」ママは、おどろ  
驚きもしないで、いった。「でも、スパイ  
になるって言ってたのは、どうするの？」

トットちゃんは、ママに て と  
手を取られてあるだ  
歩き出しながら、かんが  
考えた。(そうだわ。きのう  
までは、ぜったい  
絶対にスパイになろう、って決めてたのに。でも、いまのきっぷ  
切符をいっぱい箱にしまっておく人になるのも、とても、いいと思うわ)「そうだ！」トットちゃんは、いい  
ことを思いついて、ママの かお  
顔をのぞきながら、おおごえ  
大声をはりあげていった。「ねえ、ほんとう  
本当はスパイなんだけど、きっぷや  
切符屋さんなのは、どう？」ママはこた  
答えなかった。

ほんとう  
本当のことを言うと、ママはとてもふあん  
不安だったのだ。もし、これから行く い しょうがっこう  
小学校で、トットちゃんのことを、あずかってくれなかったら……。ちい はな  
小さい花のついた、フェ

ルトの帽子をかぶっている、ママの、きれいな顔が、少しまじめになった。そして、道を飛び跳ねながら、何かを早口でしゃべってるトットちゃんを見た。トットちゃんは、ママの心配を知らなかったから、顔があうと、うれしそうに笑っていった。「ねえ、私、やっぱり、どっちもやめて、チンドン屋さんになる！！」ママは、多少、絶望的な気分 で言った。「さあ、遅れるわ。校長先生が待ってらっしゃるんだから。もう、おしゃべりしないで、前を向いて、歩いてちょうだい」二人の目の前に、小さい学校の門が見えてきた。

## Chapter2 窓際のトットちゃん

あたらしい学校<sup>がっこう</sup>の門<sup>もん</sup>をくぐる前<sup>まえ</sup>に、トットちゃん<sup>ねん</sup>のママが、なぜ不安<sup>ふあん</sup>なのかを説明<sup>せつめい</sup>すると、それはトットちゃんが、小学校<sup>しょうがっこう</sup>一年<sup>ねん</sup>なのにかかわらず、すでに学校<sup>がっこう</sup>を退学<sup>たいがく</sup>になったからだった。一年生<sup>いちねんせい</sup>で!!

つい先週<sup>せんしゅう</sup>のことだった。ママはトットちゃん<sup>ねん</sup>の担任<sup>たんになん</sup>の先生<sup>せんせい</sup>に呼ばれて、はっきり、こういわれた。

「お宅<sup>たく</sup>のお嬢<sup>じょう</sup>さんがいると、クラス<sup>じゅう</sup>中の迷惑<sup>めいわく</sup>になります。よその学校<sup>がっこう</sup>にお連れください!」若くて美しい女<sup>わかうつくおんな</sup>の先生<sup>せんせい</sup>は、ため息<sup>いき</sup>をつきながら、繰り返し<sup>くかえ</sup>返した。「本当に困<sup>こま</sup>ってるんです!」ママはびっくりした。(一体<sup>いったい</sup>、どんなことを……。クラス<sup>じゅう</sup>中の迷惑<sup>めいわく</sup>になる、どんなことを、あの子<sup>こ</sup>がするんだろうか……)

先生<sup>せんせい</sup>は、カールしたまつ毛<sup>げ</sup>をパチパチさせ、パーマのかかった短い内巻<sup>みじかうちまき</sup>の毛<sup>け</sup>を手でなでながら説明<sup>せつめい</sup>に取り掛<sup>と</sup>かった。

「まず、授業<sup>じゅぎょう</sup>中に、机<sup>つくえ</sup>のフタを、百ぺんくらい、あけたり閉めたりするんです。そこで私<sup>わたし</sup>が、用事<sup>ようじ</sup>がないのに、開けたり閉めたりしてはいけませんと申しますと、お宅<sup>たく</sup>のお嬢<sup>じょう</sup>さんは、ノートから、筆箱<sup>ふでばこ</sup>、教科書<sup>きょうかしよ</sup>、全部<sup>ぜんぶ</sup>を机<sup>つくえ</sup>の中にしまっけてしまっけて、一つ一つ取り出すんです。たとえば、書き取りをしますとしますね。するとお嬢<sup>じょう</sup>さんは、まずフタを開けて、ノートを取り出した、と思うが早いか、パタン! とフタを閉めてしまいます。そして、すぐにまた開けて頭<sup>あ</sup>を中<sup>あた</sup>につっこんで筆箱<sup>ふでばこ</sup>から“ア”を書いための鉛筆<sup>えんぴつ</sup>を出すと、急いで閉めて、“ア”を書きます。ところが、うまく書けなかったり間違えたりしますね。そうすると、フタを開けて、また頭<sup>あ</sup>を突っ込んで、消しゴム<sup>けごむ</sup>をだし、閉めると、急いで消しゴム<sup>けごむ</sup>を使い、次に、すごい早さで開けて、消しゴム<sup>けごむ</sup>をしまっけて、フタを閉めてしまいます。で、すぐ、また開けるので見えますと、“ア”ひとつだけ書いて、道具<sup>どうぐ</sup>をひとつひとつ、全部<sup>ぜんぶ</sup>しまっけてしまいます。鉛筆<sup>えんぴつ</sup>をしまい、閉めて、また開けてノートをしまい……というふうに。そして、次の“イ”のときに、また、ノートから始<sup>はじ</sup>まって、鉛筆<sup>えんぴつ</sup>、消しゴム<sup>けごむ</sup>……その度に、私<sup>わたし</sup>の目の前<sup>めまへ</sup>で、目まぐるしく、机<sup>つくえ</sup>のフタが開いたり閉まったり。私<sup>わたし</sup>、目<sup>め</sup>が回るんです。でも、一応<sup>いちおう</sup>、用事<sup>ようじ</sup>があるんですから、

いけないとは申せませんが……」先生のまつ毛が、その時を思い出したように、パチパチと早くなった。

そこで聞いて、ママには、トットちゃんが、なんで、学校の机を、そんなに開けたり閉めたりするのか、ちょっとわかった。というのは、初めて学校に行き帰ってきた日に、トットちゃんが、ひどく興奮して、こうママに報告したことを思い出したからだ。「ねえ、学校って、すごい。家の机の引き出しは、こんな風に、引っ張るのだけど、学校のはフタが上にあがる。ゴミ箱のフタと同じなんだけど、もっとツルツルで、いろんなものが、しまえて、とってもいいんだ！」ママには、今まで見たことのない机の前で、トットちゃんが面白がって、開けたり閉めたりしてる様子が目に見えるようだった。そして、それは、(そんなに悪いことではないし、第一、だんだん馴れてくれば、そんなに開けたり閉めたりしなくなるだろう)と考えたけど、先生には、「よく注意しますから」といった。ところが、先生には、それまでの調子より声をもうすこし高くして、こういった。「それだけなら、よろしいんですけど！」ママは、すこし身がちぢむような気がした。先生は、体を少し前にのり出すといった。「机で音を立ててないな、と思うと、今度は、授業中、立ってるんです。ずーっと！」ママは、またびっくりしたので聞いた。「立ってるって、どこにでございましょうか？」先生はすこし怒った風にいった。「教室の窓のところです！」ママは、わけが分からないので、続けて質問した。「窓のところで、何をしてるんでしょうか？」先生は、半分、叫ぶような声で言った。「チンドン屋を呼び込むためです。」

先生の話を、まとめて見ると、こういうことになるらしかった。一時間目に、机をパタパタを、かなりやると、それ以後は、机を離れて、窓のところに立って外を見ている。そこで、静かにしてしてくれるのなら、立っててもいい、と先生が思った矢先に、突然、トットちゃんは、大きい声で「チンドン屋さん！」と外に向かって叫んだ。だいたい、この教室の窓というのが、トットちゃんにとっては幸福なことに、先生にとっては不幸なことに、1階にあり、しかも通りは目の前だった。そして境といえ、低い、生垣があるだけだったから、トットちゃんは、簡単に、通りを歩いてる人と、話ができるわけだったのだ。さて、通りかかったチンドン屋さんは、呼ばれたか

教室の下まで来る。するとトットちゃんは、うれしそうに、クラス中の皆に呼びかけた。「来たわよー」。勉強してたクラス中の子供は、全員、その声で窓のところに、詰め掛けて、口々に叫ぶ。「チンドン屋さん」。すると、トットちゃんは、チンドン屋さんに頼む。「ねえ、ちょっとだけで、やってみて？」学校のそばを通る時は、音をおさえめにしているチンドン屋さんも、せっかくの頼みだからというので盛大に始める。クラスネットや鉦や太鼓や、三味線で。その間、先生がどうしてるか、といえ  
ば、一段落つくまで、ひとり教壇で、ジーっと待ってるしかない。(この一曲が終わるまでの辛抱なんだから)と自分に言い聞かせながら。

さて、一曲終わると、チンドン屋さんは去って行き、生徒たちは、それぞれの席に戻る。ところが、驚いたことに、トットちゃんは、窓のところから動かない。「どうして、まだ、そこにいるのですか？」という先生の問いに、トットちゃんは、大真面目に答えた。「だって、また違うチンドン屋さんが来たら、お話しなきゃならないし。それから、さっきのチンドン屋さんが、また、戻ってきたら、大変だからです。」

「これじゃ、授業にならない、ということが、おわかりでしょう？」話してるうちに、先生は、かなり感情的になってきて、ママに言った。ママは、(なるほど、これでは先生も、お困りだわ)と思いかけた。とたん、先生は、また一段と大きな声で、こういった。「それに……」ママはびっくりしながらも、情けない思い出先生に聞いた。「まだ、あるんでございましょうか……」先生は、すぐいった。「“まだ”というように、数えられるくらいなら、こうやって、やめていただきたい、とお願いはしません!!」それから先生は、少し息を静めて、ママの顔を見て言った。「昨日のことですが、例によって、窓のところに立っているのも、またチンドン屋だと思って授業をしておりましたら、これが、また大きな声で、いきなり、『何してるの?』と、誰かに、何かを聞いているんですね。相手は、私のほうから見えませんが、誰だろう、と思っておりますと、また大きな声で、『ねえ、何をしてるの?』って。それも、今度は、通りにでなく、上のほうに向かって聞いてるんです。私も気になりまして、相手の返事が聞こえるかした、と耳を澄ましてみましたが、返事がないんです。お嬢さんは、それでも、さかんに、『ねえ、何してるの?』を続けるので、授業にもさしさわりがあるので、窓のと

ころに行<sup>い</sup>って、お嬢<sup>じょう</sup>さん<sup>はな</sup>の話<sup>あいて</sup>しかけてる相手<sup>だれ</sup>が誰<sup>み</sup>なのか、見てみようと思<sup>おも</sup>いました。  
窓<sup>まど</sup>から顔<sup>かお</sup>を出<sup>だ</sup>して上<sup>うへ</sup>を見<sup>み</sup>ましたら、なんと、つばめが、教室<sup>きょうしつ</sup>の屋根<sup>やね</sup>の下<sup>した</sup>に、巣<sup>す</sup>を作<sup>つく</sup>  
ているんです。その、つばめに聞<sup>き</sup>いてるんですね。そりゃ私<sup>わたし</sup>も、子供<sup>こども</sup>の気持<sup>きもち</sup>ちが、分<sup>わ</sup>  
からないわけじゃありませんから、つばめに聞<sup>き</sup>いてることを、馬鹿<sup>ばか</sup>げている、とは申し  
ません。授業<sup>じゅぎょう</sup>中<sup>ちゅう</sup>に、あんな声<sup>こえ</sup>で、つばめに、『何<sup>なに</sup>をしてるのか?』と聞<sup>き</sup>かなくてもいい  
いと、私<sup>わたし</sup>は思<sup>おも</sup>うんです」そして先生<sup>せんせい</sup>は、ママが、一体<sup>いったい</sup>なんとお詫<sup>わ</sup>びをしよう、と口<sup>くち</sup>を  
開<sup>あ</sup>きかけたのより、早<sup>はや</sup>く言<sup>い</sup>った。「それから、こういうことも、ございました。初<sup>はじ</sup>めて  
の図画<sup>ずが</sup>の時間<sup>じかん</sup>のことですが、国旗<sup>こっき</sup>を描<sup>えが</sup>いて御覧<sup>ごらん</sup>なさい、と私<sup>わたし</sup>が申しましたら、他<sup>ほか</sup>の子<sup>こ</sup>  
は、画用紙<sup>がようし</sup>に、ちゃんと日<sup>ひ</sup>の丸<sup>まる</sup>を描<sup>えが</sup>いたんですが、お宅<sup>たく</sup>のお嬢<sup>じょう</sup>さんは、朝日新聞<sup>あさひしんぶん</sup>の  
模様<sup>もよう</sup>のような、軍艦旗<sup>ぐんかんき</sup>を描<sup>えが</sup>き始め<sup>はじ</sup>めました。それなら、それでいい、と思<sup>おも</sup>ってましたら、  
突然<sup>とつぜん</sup>、旗<sup>はた</sup>の周<sup>まわ</sup>りに、ふさを、つけ始め<sup>はじ</sup>めたんです。ふさ。よく青年団<sup>せいねんだん</sup>とか、そういった  
旗<sup>はた</sup>についてます。あの、ふさです。で、それも、まあ、どこかで見<sup>み</sup>たのだろうから、と  
思<sup>おも</sup>っておりました。ところが、ちょっ<sup>め</sup>と目<sup>め</sup>を離<sup>はな</sup>したキスに、まあ、黄色<sup>きいろ</sup>のふさを、机<sup>つくえ</sup>に  
まで、どん<sup>えが</sup>どん描<sup>えが</sup>いちゃってるんです。だいたい画用紙<sup>がようし</sup>に、ほぼいっばいに旗<sup>はた</sup>を描<sup>えが</sup>いた  
んですから、ふさの余裕<sup>よゆう</sup>は、もともと、あまりなかったんですが、それに、黄色<sup>きいろ</sup>のクレ  
ヨンで、ゴシゴシふさを描<sup>えが</sup>いたんですね。それが、はみ出<sup>だ</sup>しちゃって、画用紙<sup>がようし</sup>をどかし  
たら、机<sup>つくえ</sup>に、ひどい黄色<sup>きいろ</sup>のギザギザが<sup>のこ</sup>残<sup>のこ</sup>ってしま<sup>のこ</sup>って、ふいても、こすっても、とれま  
せん。まあ、幸<sup>さいわ</sup>いなことは、ギザギザが三方向<sup>さんほう</sup>だけだった、ってことでしょうか？」マ  
マは、ちぢこまりながらも、急<sup>いそ</sup>いで質<sup>しつもん</sup>問<sup>もん</sup>した。「三方向<sup>さんほう</sup>っていうのは……」先生<sup>せんせい</sup>は、そ  
ろそろ疲<sup>つか</sup>れてきた、という様子<sup>ようす</sup>だったが、それでも親<sup>しんせつ</sup>切<sup>せつ</sup>にい<sup>はた</sup>った。「旗竿<sup>はたざお</sup>を左<sup>ひだり</sup>は<sup>は</sup>じに  
描<sup>えが</sup>きましたから、旗<sup>はた</sup>のギザギザは、三方向<sup>さんほう</sup>だけだったんでございます」ママは、少し助<sup>すこ</sup>  
かった、と思<sup>おも</sup>って、「はあ、それで三方向<sup>さんほう</sup>だけ……」とい<sup>せんせい</sup>った。すると、先生<sup>せんせい</sup>は、次<sup>つぎ</sup>に、  
と<sup>くちよう</sup>っても、ゆ<sup>ひとこと</sup>っくりの口調<sup>くちよう</sup>で、一<sup>く</sup>言<sup>ぎ</sup>ずつ区切<sup>か</sup>って「ただし、その代<sup>はたざお</sup>わり、旗竿<sup>はたざお</sup>のは<sup>は</sup>じ  
が、やはり、机<sup>つくえ</sup>に、はみ出<sup>だ</sup>して、残<sup>のこ</sup>っております!!」それから先生<sup>せんせい</sup>は立<sup>た</sup>ち上<sup>あ</sup>がると、か  
なり冷<sup>つめ</sup>たい感<sup>かん</sup>じで、とどめをさすように言<sup>い</sup>った。「それと、迷<sup>めい</sup>惑<sup>わく</sup>しているのは、私<sup>わたし</sup>だけ  
ではございませ<sup>となり</sup>ん。隣<sup>いちねんせい</sup>の一年生<sup>う</sup>の受<sup>も</sup>け持<sup>せんせい</sup>ちの先生<sup>こま</sup>もお困<sup>こま</sup>りのことが、あるそうですか  
ら……」ママは、決<sup>けっしん</sup>心<sup>しん</sup>しないわけには、い<sup>たし</sup>かなか<sup>ほか</sup>った。(確<sup>たし</sup>かに、これ<sup>ほか</sup>じゃ、他<sup>せい</sup>の生徒<sup>と</sup>)

さんに、ご迷惑<sup>めいわく</sup>すぎる。どこか、他の学校<sup>ほかに がっこう さが</sup>を探して、移<sup>うつ</sup>したほうが、よさそうだ。何とか、あの子<sup>こ</sup>の性格<sup>せいかく</sup>がわかっていただけて、皆<sup>みな</sup>と一緒<sup>いっしょ</sup>にやっ<sup>おし</sup>ていくことを教えてくださるような学校<sup>がっこう</sup>に……) そうして、ママが、あっちこっち、かけずりまわって見<sup>み</sup>つけたのが、これから行<sup>い</sup>こうとしている学校<sup>がっこう</sup>、というわけだったのだ。ママは、この退学<sup>たいがく</sup>のことを、トットちゃんに話<sup>はな</sup>していなかった。話<sup>はな</sup>しても、何<sup>なに</sup>がいけなかったのか、わからないだろうし、また、そんなにことで、トットちゃんが、コンプレックスを持<sup>も</sup>つのも、よくないと思<sup>おも</sup>ったから、(いつか、大き<sup>おお</sup>くなったら、話<sup>はな</sup>しましょう) と、きめていた。ただ、トットちゃんには、こうい<sup>い</sup>った。「新<sup>あた</sup>しい学校<sup>がっこう</sup>に行<sup>い</sup>ってみない? いい学校<sup>がっこう</sup>だって話<sup>はなし</sup>よ」トットちゃんは、少<sup>すこ</sup>し考<sup>かんが</sup>えてから、言<sup>い</sup>った。「行<sup>い</sup>くけど……」ママは、(この子<sup>こ</sup>は、今何<sup>いまなに</sup>を考<sup>かんが</sup>えてるのだろうか) と思<sup>おも</sup>った。(うすうす、退学<sup>たいがく</sup>のこと、気<sup>き</sup>がついていたんだろうか……) 次<sup>つぎ</sup>の瞬<sup>しゅん</sup>間<sup>かん</sup>、トットちゃんは、ママの腕<sup>うで</sup>の中<sup>なか</sup>に、飛<sup>と</sup>び込<sup>こ</sup>んで来<sup>き</sup>て、い<sup>い</sup>った。「ねえ、今度<sup>こんど</sup>の学校<sup>がっこう</sup>に、いいチンドン屋<sup>や</sup>さん、来<sup>く</sup>るかな?」とにかく、そんなわけ<sup>わけ</sup>で、トットちゃん<sup>トットちゃん</sup>とママは、新<sup>あた</sup>しい学校<sup>がっこう</sup>に向<sup>む</sup>かって、歩<sup>ある</sup>いているのだった。



## Chapter3 新しい学校

学校の門が、はっきり見えるところまで来て、トットちゃんは、立ち止った。なぜなら、この間まで行っていた学校の門は、立派なコンクリートみたいな柱で、学校の名前も、大きく書いてあった。ところが、この新しい学校の門ときたら、低い木で、しかも葉っぱが生えていた。

「地面から生えてる門ね」

と、トットちゃんはママに言った。そうして、こう、付け加えた。

「きっと、どんだんはえて、今に電信柱より高くなるわ」

確かに、その二本の門は、根っこのある木だった。トットちゃんは、門に近づくと、いきなり顔を、斜めにした。なぜかといえば、門にぶら下げてある学校の名前を書いた札が、風に吹かれたのか、斜めになっていたからだった。

「トモエがくえん」トットちゃんは、顔を斜めにしたまま、表札を読み上げた。そして、ママに、

「トモエって、なあに？」

と聞こうとしたときだった。トットちゃんの目の端に、夢としか思えないものが見えたのだった。トットちゃんは、身をかがめると、門の植え込みの、隙間に頭を突っ込んで、門の中をのぞいてみた。どうしよう、みえたんだけど！

「ママ！ あれ、本当の電車？ 校庭に並んでるの」

それは、走っていない、本当の電車が六台、教室用に、置かれてあるのだった。

トットちゃんは、夢のように思った。“電車の教室……”

電車で窓が、朝の光を受けて、キラキラと光っていた。目を輝かして、のぞいているトットちゃんの、ホッペタも、光っていた。

## Chapter4 気に入ったわ

次の瞬間、トットちゃんは、「わーい」と歓声を上げると、電車の教室のほうに向かって走り出した。そして、走りながら、ママに向かって叫んだ。

「ねえ、早く、動かない電車に乗ってみよう!」

ママは、驚いて走り出した。もとバスケットボールの選手だったママの足は、トットちゃんより速かったから、トットちゃんが、後、ちょっとでドア、というときに、スカートを捕まえられてしまった。ママは、スカートのはしを、ぎっちり握ったまま、トットちゃんにいった。

「ダメよ。この電車は、この学校のお教室なんだし、あなたは、まだ、この学校に入れていただいてないんだから。もし、どうしても、この電車に乗りたかったら、これからお目にかかる校長先生とちゃんと、お話してちょうだい。そして、うまくいったら、この学校に通えるんだから、分かった?」

トットちゃんは、（今乗れないのは、とても残念なことだ）と思ったけど、ママのいう通りにしようときめたから、大きな声で、

「うん」

といって、それから、いそいで、つけたした。

「私、この学校、とっても気に入ったわ」

ママは、トットちゃんが気に入ったかどうかより、校長先生が、トットちゃんを気に入ってくださるかどうかが問題なのよ、といたい気がしたけど、とにかく、トットちゃんのスカートから手を離し、手をつないで校長室のほうに歩き出した。

どの電車も静かで、ちょっと前に、一時間目の授業が始まったようだった。あまり広くない校庭の周りには、塀の変わりに、いろんな種類の木が植わっていて、花壇には、赤や黄色の花がいっぱい咲いていた。

校長室は、電車ではなく、ちょうど、門から正面に見える扇形に広がった七段くらいある石の階段を上った、その右手にあった。

トットちゃんは、ママの手を振り切ると、階段を駆け上がって行ったが、急に止まっ

て、振り向いた。だから、後ろから行ったママは、もう少しで、トットちゃんと正面衝突するところだった。

「どうしたの？」

ママは、トットちゃんの気が変わったのかと思って、急いで聞いた。トットちゃんは、ちょうど階段の一番うえに立った形だったけど、まじめな顔をして、小声でママに聞いた。

「ねえ、これからあいに行く人って、駅の人なんじゃないの？」

ママは、かなり辛抱づよい人間だったから……というか、面白がりやだったから、やはり小声になって、トットちゃんに顔をつけて、聞いた。

「どうして？」

トットちゃんは、ますます声をひそめて言った。

「だってさ、校長先生って、ママいったけど、こんなに電車、いっぱい持ってるんだから、本当は、駅の人なんじゃないの？」

確かに、電車の払い下げを校舎にしている学校なんてめずらしいから、トットちゃんの疑問も、もっとものこと、とママも思ったけど、この際、説明してるヒマはないので、こういった。

「じゃ、あなた、校長先生に伺って御覧なさい、自分で。それと、あなたのパパのことを考えてみて？ パパはヴァイオリンを弾く人で、いくつかヴァイオリンを持ってるけど、ヴァイオリン屋さんじゃないでしょう？ そういう人もいるのよ」トットちゃんは、「そうか」というと、ママと手をつないだ。

## Chapter5 校長先生

トットちゃんとママが入っていくと、部屋の中にいた男の人が椅子から立ち上がった。その人は、頭の毛が薄くなっていて、前のほうの歯が抜けていて、顔の血色がよく、背はあまり高くないけど、肩や腕が、がっちりしていて、ヨレヨレの黒の三つ揃いを、キチンと着ていた。

トットちゃんは、急いで、お辞儀をしてから、元気よく聞いた。

「校長先生か、駅の人か、どっち？」

ママが、慌てて説明しよう、とするまえに、その人は笑いながら答えた。

「校長先生だよ」

トットちゃんは、とってもうれしそうに言った。

「よかった。じゃ、おねがい。私、この学校にいたい」

校長先生は、椅子をトットちゃんに勧めると、ママのほうを向いて言った。

「じゃ、僕は、これからトットちゃんと話がありますから、もう、お帰り下さって結構です」

ほんのちょっとの間、トットちゃんは、少し心細い気がしたけど、なんとなく、(この校長先生ならいいや)と思った。ママは、いさぎよく先生にいった。

「じゃ、よろしく、お願いします」

そして、ドアを閉めて出て行った。

校長先生は、トットちゃんの前に椅子を引っ張ってきて、とても近い位置に、向かい合わせに腰をかけると、こういった。

「さあ、何でも、先生に話してごらん。話したいこと、全部」

「話したいこと!？」

(なにか聞かれて、お返事するのかな?) と思っていたトットちゃんは、「何でも話していい」と聞いて、ものすごくうれしくなって、すぐ話し始めた。順序も、話し方も、少しグチャグチャだったけど、一生懸命に話した。

今乗ってきた電車が速かったこと。

えき かいさつぐち 駅の改札口のおじさんに、おねが ねが お願いしたけど、きつぷ 切符をくれなかったこと。

まえ い 前に行ってた学校の受け持ちの女の先生は、かお 顔がきれいだということ。

その学校には、つばめのす 巣があること。

いえ 家には、ロッキーという ちゃいろ 茶色の犬がいて“お手”と“ごめんくださいませ”と、ごはん あと 飯の後で、“まんぞく まんぞく 満足、満足”ができること。

ようちえん 幼稚園のとき、ハサミを口の中に入れて、チョキチョキやると、「した き 舌を切ります」と先生がいか 怒ったけど、なんかい 何回もやっちゃったってということ。

はな 涙が出てきたときは、いつまでも、ズルズルやってると、ママにしかられるから、なるべく早くかむこと。

パパは、うみ およ 海で泳ぐのがじょうず と 上手で、と こ 飛び込みだってで き 出来ること。

こういったことを、つぎ つぎ 次から次と、トットちゃんははな はな 話した。先生は、わら 笑ったり、うな ずいたり、「それから?」とかいったりしてくださったから、うれしくて、トットちゃんは、いつまでもはな はな 話した。でも、とうとう、はなし はなし 話がなくなった。トットちゃんは、口をつぐんで かんが 考えていると、先生はいった。

「もう、ないかい?」

トットちゃんは、これでおしまいにしてしまうのは、ざんねん おも 残念だと思った。

せっかく はなし 話を、いっぱい聞いてもらう、いいチャンスなのに。

(なにか、はなし はなし 話は、ないかなあ……)

あたま 頭の中が、いそが うご 忙しく動いた。と思ったら、「よかった!」。はなし はなし 話が見つかった。

それは、その日、トットちゃんがき 着てるようふく 洋服のことだった。たいがいのようふく 洋服は、ママがてせい つく て手製で作ってくれるのだけれど、きょう か 今日のは、買ったものだった。というのも、なにしろトットちゃんがゆうがた そと かえ 夕方、外から帰ってきたとき、どのようふく 洋服もビリビリで、ときには、ジャキジャキのときもあったし、どうしてそうなるのか、ママにもぜったい 絶対わからないのだけれど、白いもめん もめん 木綿でゴム入りのパンツまで、ビリビリになっているのだから。トットちゃんのはなし はなし 話によると、よそのいえ にわ 家の庭をつつきってかきね 垣根をもぐったり、はら 原っぱのてつじょうもう 鉄条網をくぐるとき、「こんなになっちゃうんだ」ということなのだけれど、とにかく、そんなぐあい 具合で、けっきょく 結局、け さ いえ 今朝、家をでるとき、てせい てせい ママの手製の、しゃれたのは、どれもビリビリ

で、仕方なく、前に買ったのを着てきたのだった。それはワンピースで、エンジとグレーの細かいチェックで、布地はジャージだから、悪くはないけど、衿にしてある、花の刺繍の、赤い色が、ママは、「趣味が悪い」といていた。そのことを、トットちゃん、思い出したのだった。だから、急いで椅子から降りると、衿を手で持ち上げて、先生のそばに行き、こういった。

「この衿ね、ママ、嫌いなんだって!」

それをいってしまったら、どう考えてみても、本当に、話しはもう無くなった。トットちゃんは（少し悲しい）と思った。トットちゃんが、そう思ったとき、先生が立ち上がった。そして、トットちゃんの頭に、大きく暖かい手を置くと、

「じゃ、これで、君は、この学校の生徒だよ」

そういった。……その時、トットちゃんは、なんだか、生まれて初めて、本当に好きな人にあつたような気がした。だって、生まれてから今日まで、こんな長い時間、自分の話を聞いてくれた人は、いなかったんだもの。そして、その長い時間の間、一度だって、あくびをしたり、退屈そうにしないで、トットちゃんが話してるのと同じように、身を乗り出して、一生懸命、聞いてくれたんだもの。

トットちゃんは、このとき、まだ時計が読めなかったんだけど、それでも長い時間、と思ったくらいなんだから、もし読めたら、ビックリしたに違いない。そして、もっと先生に感謝したに違いない。というのは、トットちゃんとママが学校に着いたのが八時で、校長室で全部の話が終わって、トットちゃんが、この学校の生徒になった、と決まったとき、先生が懐中時計を見て、「ああ、お弁当の時間だな」といったから、つまり、たっぷり四時間、先生は、トットちゃんの話聞いてくれたことになるのだった。

後にも先にも、トットちゃんの話、こんなにちゃんと聞いてくれた大人は、いなかった。

それにしても、まだ小学校一年生になったばかりのトットちゃんが、四時間も、一人でしゃべるぶんの話があったことは、ママや、前の学校の先生が聞いたら、きっと、ビックリするに違いないことだった。

このとき、トットちゃんは、まだ退学のことはもちろん、周りの大人が、手こずっ

てることも、気がついていなかったし、もともと性格も陽気で、忘れっぽいタチだったから、無邪気に見えた。でも、トットちゃんの中のどこかに、なんとなく、疎外感のような、他の子供と違って、ひとりだけ、ちょっと、冷たい目で見られているようなものを、おぼろげには感じていた。それが、この校長先生となると、安心で、暖かくて、気持ちよかった。

（この人となら、ずーっと一緒にいてもいい）これが、校長先生、小林宗作氏に、初めて遭った日、トットちゃんを感じた、感想だった。そして、有難いことに、校長先生も、トットちゃんと、同じ感想を、その時、持っていたのだった。

## Chapter6 お弁当

トットちゃんは、校 長 先生に連れられて、みんなが、お弁当を食べるところを、見に行くことになった。お昼だけは、電 車 でなく、「みんな、講 堂 に集まることになっている」と校 長 先生が教えてくれた。講 堂 はさっきトットちゃんが上がってきた石の階 段 の、突き当たりにあった。いってみると、生徒たちが、大騒ぎをしながら、机 と椅子を、講 堂 に、まーるく輪になるように、並べているところだった。隅っこで、それを見ていたトットちゃんは、校 長 先生の上着を引っ張って聞いた。

「他の生徒は、どこにいるの？」

校 長 先生は答えた。

「これで全部なんだよ」

「全部!？」

トットちゃんは、信じられない気がした。だって、前の学校の一クラスと同じくらいしか、いないんだもの。そうすると、

「学校中で、五十人くらいなの？」

校 長 先生は、「そうだ」といった。トットちゃんは、なにもかも、前の学校と違ってると思った。

みんなが着 席 すると、校 長 先生は、

「みんな、海のもの、山のもの、もって来たかい？」

と聞いた。

「はい」

みんな、それぞれの、お弁当の、ふたを取った。

「どれどれ」

校 長 先生は、机 で出来た円の中に入ると、ひとりずつ、お弁当をのぞきながら、歩いている。

生徒たちは、笑ったり、キイキイいったり、にぎやかだった。

「海のもの、山のもの、って、なんだろう」



トットちゃんは、おかしくなった。でも、とっても、とっても、この学校は変わっ  
ていて、面白<sup>おもしろ</sup>そう。お弁当<sup>べんとう</sup>の時間<sup>じかん</sup>が、こんなに、愉快<sup>ゆかい</sup>で、楽<sup>たの</sup>しいなんて、知らなかつ  
た。トットちゃんは、明日<sup>あした</sup>からは、自分<sup>じぶん</sup>も、あの机<sup>つくえ</sup>に座<sup>すわ</sup>って、『海<sup>うみ</sup>のものと、山<sup>やま</sup>のもの』  
の弁当<sup>べんとう</sup>を、校<sup>こう</sup>長<sup>ちょう</sup>先生<sup>せんせい</sup>に見てもらうんだ、と思うと、もう、嬉<sup>うれ</sup>しさと、楽<sup>たの</sup>しさで、胸<sup>むね</sup>が  
いっぱいになり、叫<sup>さけ</sup>びそうになった。お弁当<sup>べんとう</sup>を、のぞきこんでる校<sup>こう</sup>長<sup>ちょう</sup>先生<sup>せんせい</sup>の肩<sup>かた</sup>に、お  
昼<sup>ひる</sup>の光<sup>ひかり</sup>が、やわらかく止<sup>と</sup>まっていた。

## Chapter7 今日から学校に行く

きのう、「<sup>きょう</sup>今日から、<sup>きみ</sup>君は、もう、この学校の<sup>せいと</sup>生徒だよ」、そう校<sup>こう</sup>長<sup>ちやう</sup>先生<sup>い</sup>に言われたトットちゃんにとって、こんなに次の日<sup>つぎ</sup>が待ち<sup>ま</sup>遠<sup>ど</sup>しい、ってことは、<sup>いま</sup>今までになかった。だから、いつもなら朝<sup>あさ</sup>、ママが叩<sup>たた</sup>き起<sup>お</sup>こしても、まだベッドの上でぼんやりしてることの多いトットちゃんが、この日ばかりは、誰<sup>だれ</sup>からも起<sup>お</sup>こされない<sup>まえ</sup>前に、もうソックスまではいて、ランドセルを<sup>せ</sup>背<sup>お</sup>負<sup>お</sup>って、みんなの起<sup>お</sup>きるのを<sup>ま</sup>待<sup>ま</sup>っていた。

この家<sup>いえ</sup>の中で、いちばん、きちんと時間<sup>じかん</sup>を守るシェパードのロッキーは、トットちゃんの、いつもと違う行<sup>ちが</sup>動<sup>こう</sup>に、怪訝<sup>けげん</sup>そうな目<sup>む</sup>を向けながら、それでも、大きく伸<sup>の</sup>びをする、トットちゃんにぴったりとくっついて、(何か始<sup>なに</sup>まるらしい) <sup>はじ</sup>ことを<sup>きたい</sup>期待<sup>き</sup>した。

ママは大<sup>たい</sup>変<sup>へん</sup>だった。大<sup>お</sup>忙<sup>まい</sup>しで、『海<sup>うみ</sup>のものと山<sup>やま</sup>のもの』のお弁<sup>べん</sup>当<sup>とう</sup>を作り、トットちゃんに朝<sup>あさ</sup>ごはんを食<sup>た</sup>べさせ、毛糸<sup>けいと</sup>で編<sup>あ</sup>んだヒモを通<sup>とお</sup>した、セルロイドの定期<sup>ていき</sup>入れを、トットちゃん<sup>くび</sup>の首<sup>く</sup>にかけた。これは定期<sup>ていき</sup>を、なくさないためだった。パパは

「いい子でね」

と<sup>あたま</sup>頭<sup>い</sup>をモシャモシャにしたまま言<sup>い</sup>った。

「もちろん!」

と、トットちゃんは言<sup>い</sup>うと、玄関<sup>げんかん</sup>で靴<sup>くつ</sup>を履<sup>は</sup>き、戸<sup>と</sup>を開<sup>あ</sup>けると、クルリと家<sup>いえ</sup>の中<sup>む</sup>を向<sup>む</sup>き、丁寧<sup>ていねい</sup>にお辞儀<sup>じぎ</sup>をして、こう言<sup>い</sup>った。

「みなさま、行<sup>い</sup>ってまいります」

見送<sup>みおく</sup>りに立<sup>た</sup>っていたママは、ちょっと涙<sup>なみだ</sup>がでそうになった。それは、こんなに生き生きとして行<sup>ぎょうぎ</sup>儀<sup>ぎ</sup>よく、素直<sup>すなお</sup>で、楽<sup>たの</sup>しそうにしてるトットちゃんが、つい、このあいだ、「退学<sup>たいがく</sup>になった」、<sup>おも</sup>というこ<sup>だ</sup>を思<sup>おも</sup>い出<sup>だ</sup>したからだった。(新<sup>あた</sup>しい学校<sup>がっこう</sup>で、うまくいくといい……) ママは心<sup>こころ</sup>から<sup>いの</sup>そう祈<sup>いの</sup>った。

ところが、次<sup>つぎ</sup>の瞬<sup>しゅん</sup>間<sup>かん</sup>、ママは、飛<sup>と</sup>び上<sup>あ</sup>がるほど驚<sup>おどろ</sup>いた。というのは、トットちゃんが、せっかくママが首<sup>くび</sup>からかけた定期<sup>ていき</sup>を、ロッキーの首<sup>くび</sup>にかけているのを見たからだった。ママは、(一<sup>い</sup>体<sup>たい</sup>どうなるのだろう?) と思<sup>おも</sup>ったけど、だまって、成<sup>な</sup>り行<sup>ゆ</sup>きを見ることにした。トットちゃん<sup>くび</sup>は、定期<sup>ていき</sup>をロッキーの首<sup>くび</sup>にかけると、しゃがんで、ロッキーに、

こういった。

「いい?この定期<sup>ていき</sup>のヒモは、あんたに、合わないのよ」

確かに、ロッキーにはヒモが長く、定期<sup>ていき</sup>は地面<sup>じめん</sup>を引きずっていた。

「わかった? これは私<sup>わたし</sup>の定期<sup>ていき</sup>で、あんたのじゃないから、あんたは電車<sup>でんしゃ</sup>に乘れないの。校長先生<sup>こうちょう</sup>に聞いてみるけど、駅<sup>えき</sup>の人にも。で『いい』っていったら、あんたも学校<sup>こ</sup>に来られるんだけど、どうかなあ」

ロッキーは、途中<sup>とちゅう</sup>までは、耳をピンと立てて神妙<sup>しんみょう</sup>に聞いていたけど、説明<sup>せつめい</sup>の終わりのところで、定期<sup>ていき</sup>を、ちょっと、なめてみて、それから、あくびをした。それでも、トットちゃんは、一生懸命<sup>いっしょうけんめい</sup>に話し続けた。

「電車<sup>でんしゃ</sup>の教室<sup>きょうしつ</sup>は、動かないから、お教室<sup>きょうしつ</sup>では、定期<sup>ていき</sup>はいらないと思うんだ。とにかく、今日<sup>きょう</sup>は持ってるのよ」

たしかにロッキーは、今まで、歩いて通う学校<sup>もん</sup>の門まで、毎日、トットちゃんと一緒<sup>いっしょ</sup>に行って、後は、一人で家<sup>いえ</sup>に帰<sup>かえ</sup>ってきていたから、今日<sup>きょう</sup>も、そのつもりでいた。

トットちゃんは、定期<sup>ていき</sup>をロッキーの首<sup>くび</sup>からはずすと、大切<sup>たいせつ</sup>そうに自分の首<sup>くび</sup>にかけると、パパとママに、もう一度<sup>いちど</sup>、『行ってまいりまーす』というと、今度<sup>こんど</sup>は振り返らずに、ランドセルをカタカタいわせて走り出<sup>はし</sup>した。ロッキーも、からだをのびのびさせながら、並<sup>なら</sup>んで走り出<sup>はし</sup>した。

駅<sup>えき</sup>までの道<sup>みち</sup>は、前<sup>まえ</sup>の学校<sup>い</sup>に行く道<sup>みち</sup>と、ほとんど変わらなかった。だから、途中<sup>とちゅう</sup>でトットちゃんは、顔見知り<sup>かおみし</sup>の犬<sup>ねこ</sup>や猫<sup>まねこ</sup>や、前<sup>まえ</sup>の同級生<sup>どうきゅう</sup>と、すれ違った。トットちゃんは、その度<sup>たび</sup>に、「定期<sup>ていき</sup>を見せて、驚<sup>おどろ</sup>かせてやろうかな?」と思ったけど、(もし遅<sup>おそ</sup>くなったら大変<sup>たいへん</sup>だから、今日<sup>きょう</sup>は、よそう……)と決めて、どんどん歩<sup>ある</sup>いた。

駅<sup>えき</sup>のところに來て、いつもなら左<sup>ひだり</sup>に行くトットちゃんが、右<sup>みぎ</sup>に曲<sup>ま</sup>がったので、可哀<sup>かわい</sup>そうにロッキーは、とても心配<sup>しんぱい</sup>そうに立ち止<sup>た</sup>まって、キョロキョロした。トットちゃんは、改札口<sup>かいさつぐち</sup>のところまで行<sup>い</sup>ったんだけど、戻<sup>もど</sup>ってきて、まだ不思議<sup>ふしぎ</sup>そうな顔<sup>かお</sup>をしてるロッキーにいった。

「もう、前<sup>まえ</sup>の学校<sup>い</sup>には行かないのよ。新<sup>あた</sup>しい学校<sup>い</sup>に行くんだから」

それからトットちゃんは、ロッキーの顔<sup>かお</sup>に、自分の顔<sup>かお</sup>をくっつけ、ついでにロッキー

の耳の中の、においをかいだ。(いつもと同じくらい、くさいけれど、私<sup>わたし</sup>には、いい、に  
おい!) そう思うと顔を離<sup>おも</sup>して、<sup>かお</sup>「バイバイ」というと、定期<sup>ていき</sup>を駅<sup>えき</sup>の人に見せて、ちょっと  
高<sup>たか</sup>い駅<sup>えき</sup>の階<sup>かい</sup>段<sup>だん</sup>を、登<sup>のぼ</sup>り始<sup>はじ</sup>めた。ロッキーは、小<sup>こ</sup>さい声<sup>こえ</sup>で鳴<sup>な</sup>いて、トットちゃん<sup>かいだん</sup>が階<sup>かい</sup>段<sup>だん</sup>  
を上<sup>み</sup>がっていくのを、いつまでも見<sup>み</sup>送<sup>おく</sup>っていた。

## Chapter8 電車の教室

トットちゃんが、きのう、校<sup>こう</sup>長<sup>ちょう</sup>先生<sup>せんせい</sup>から教<sup>おし</sup>えていただいた、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の教<sup>きょう</sup>室<sup>しつ</sup>である、  
電<sup>でん</sup>車<sup>しゃ</sup>のドアに手をかけたとき、まだ校<sup>こう</sup>庭<sup>てい</sup>には、誰<sup>だれ</sup>の姿<sup>すがた</sup>も見えなかった。今<sup>いま</sup>と違<sup>ちが</sup>って、  
昔<sup>むかし</sup>の電<sup>でん</sup>車<sup>しゃ</sup>は、外<sup>そと</sup>から開<sup>あ</sup>くように、ドアに取<sup>と</sup>手<sup>て</sup>がついていた。両<sup>りょう</sup>手<sup>て</sup>で、その取<sup>と</sup>手<sup>て</sup>を持<sup>も</sup>っ  
て、右<sup>みぎ</sup>に引<sup>ひ</sup>くと、ドアは、すぐ開<sup>あ</sup>いた。トットちゃんは、ドキドキしながら、そーっと、  
首<sup>くび</sup>を突<sup>つ</sup>っ込<sup>こ</sup>んで、中<sup>ちゅう</sup>を見てみた。

「わあーい」

これなら、勉<sup>べん</sup>強<sup>きやう</sup>しながら、いつも旅<sup>りょ</sup>行<sup>こう</sup>をしるみたいじゃない。網<sup>あみ</sup>柵<sup>だな</sup>もあるし、  
窓<sup>まど</sup>も全<sup>ぜん</sup>部<sup>ぶ</sup>、そのままだし。違<sup>ちが</sup>うところは、運<sup>うん</sup>転<sup>てん</sup>手<sup>しゅ</sup>さんの席<sup>せき</sup>のところに黒<sup>こく</sup>板<sup>ばん</sup>があるのと、  
電<sup>でん</sup>車<sup>しゃ</sup>の長<sup>なが</sup>い腰<sup>こしかけ</sup>掛<sup>かけ</sup>を、はずして、生<sup>せい</sup>徒<sup>と</sup>用<sup>よう</sup>の机<sup>つくえ</sup>と腰<sup>こしかけ</sup>掛<sup>かけ</sup>が進<sup>しん</sup>行<sup>こう</sup>方<sup>ほう</sup>向<sup>こう</sup>に向<sup>む</sup>いて並<sup>なら</sup>んでいる  
のと、つり革<sup>かわ</sup>が無<sup>な</sup>いところだけ。後<sup>あと</sup>は、天<sup>てん</sup>井<sup>じょう</sup>も床<sup>ゆか</sup>も、全<sup>ぜん</sup>部<sup>ぶ</sup>、電<sup>でん</sup>車<sup>しゃ</sup>のままになっていた。  
トットちゃんは靴<sup>くつ</sup>を脱<sup>ぬ</sup>いで中<sup>ちゅう</sup>に入り、誰<sup>だれ</sup>でも腰<sup>こしかけ</sup>掛<sup>かけ</sup>ていたいくらい、気<sup>き</sup>持<sup>も</sup>ちのいい椅子<sup>いす</sup>  
だった。トットちゃんは、うれしくて、(こんな気<sup>き</sup>に入<sup>い</sup>った学<sup>がく</sup>校<sup>こう</sup>は、絶<sup>ぜ</sup>対<sup>たい</sup>に、お休<sup>やす</sup>みな  
んかしないで、ずーっとくる) と、強<sup>つよ</sup>く心<sup>こころ</sup>に思<sup>おも</sup>った。

それからトットちゃんは、窓<sup>まど</sup>から外<sup>そと</sup>を見ていた。すると、動<sup>うご</sup>いていないはずの電<sup>でん</sup>車<sup>しゃ</sup>  
なのに、校<sup>こう</sup>庭<sup>てい</sup>の花<sup>はな</sup>や木<sup>き</sup>が、少<sup>すこ</sup>し風<sup>かぜ</sup>に揺<sup>ゆ</sup>れているせいか、電<sup>でん</sup>車<sup>しゃ</sup>が走<sup>はし</sup>っているような気<sup>き</sup>持<sup>も</sup>  
ちになった。

「ああ、嬉<sup>うれ</sup>しいなあー」

トットちゃんは、とうとう声<sup>こえ</sup>に出<sup>で</sup>して、そういった。それから、顔<sup>かお</sup>をぺったりガラ  
ス窓<sup>まど</sup>にくっつけると、いつも、嬉<sup>うれ</sup>しいとき、そうするように、デタラメ歌<sup>うた</sup>を、うたいは  
じめた。

とても うれし

うれし とても

どうしてかっていえば……

そこまで歌<sup>うた</sup>ったとき、誰<sup>だれ</sup>かが乗<sup>の</sup>り込<sup>こ</sup>んできた。女<sup>おんな</sup>の子<sup>こ</sup>だった。その子<sup>こ</sup>は、ノートと  
筆<sup>ふで</sup>箱<sup>ばこ</sup>をランドセルから出<sup>で</sup>して机<sup>つくえ</sup>の上<sup>うへ</sup>に置<sup>お</sup>くと、背<sup>せ</sup>伸<sup>の</sup>びをし、網<sup>あみ</sup>柵<sup>だな</sup>にランドセルをの

せた。それから草履袋<sup>ぞうりぶくろ</sup>も、のせた。トットちゃんは歌<sup>うた</sup>をやめて、急い<sup>いそ</sup>いで、まねをした。  
つぎに、男の子が乗<sup>の</sup>ってきた。その子は、ドアのところから、バスケットボールのように、  
ランドセルを、網<sup>あみ</sup>柵<sup>だな</sup>に投げ込んだ。網<sup>あみ</sup>柵<sup>だな</sup>の、網<sup>あみ</sup>は、大きく波<sup>なみ</sup>うつと、ランドセルを、投<sup>な</sup>  
げ出<sup>だ</sup>した。ランドセルは、床<sup>ゆか</sup>に落<sup>お</sup>ちた。その男の子は、「失<sup>し</sup>敗<sup>ぱい</sup>!」という<sup>し</sup>と、またもや、  
同<sup>おな</sup>じところから、網<sup>あみ</sup>柵<sup>だな</sup>めがけて、投<sup>な</sup>げ込<sup>こ</sup>んだ。今<sup>こん</sup>度は、うま<sup>ど</sup>く、おさ<sup>せい</sup>まった。『成<sup>せい</sup>功<sup>こう</sup>!』  
と、その子は叫<sup>さけ</sup>ぶと、すぐ、「失<sup>し</sup>敗<sup>ぱい</sup>!」とい<sup>つ</sup>って、机<sup>つくえ</sup>によ<sup>の</sup>じ登<sup>ぼ</sup>ると、網<sup>あみ</sup>柵<sup>だな</sup>のランドセル  
を開<sup>あ</sup>けて、筆<sup>ふ</sup>箱<sup>でばこ</sup>やノートを出<sup>で</sup>した。そうい<sup>わ</sup>うのを出<sup>す</sup>すのを忘<sup>わす</sup>れたから、失<sup>し</sup>敗<sup>ぱい</sup>だっ<sup>ち</sup>たに  
違<sup>ちが</sup>い<sup>が</sup>な<sup>が</sup>かった。

こうして、九<sup>せい</sup>人の生<sup>せい</sup>徒<sup>と</sup>が、トットちゃん<sup>でんしゃ</sup>の電<sup>でん</sup>車<sup>しゃ</sup>に<sup>の</sup>乗<sup>こ</sup>り込<sup>こ</sup>んできて、それが、トモエ  
学<sup>がく</sup>園<sup>えん</sup>の、一<sup>ぜん</sup>年<sup>いん</sup>生<sup>せい</sup>の全<sup>ぜん</sup>員<sup>いん</sup>だ<sup>いん</sup>った。

そしてそれは、同<sup>おな</sup>じ電<sup>でん</sup>車<sup>しゃ</sup>で<sup>たび</sup>旅<sup>りょ</sup>を<sup>な</sup>する、仲<sup>なか</sup>間<sup>ま</sup>だ<sup>ま</sup>った。

## Chapter9 授業

お教室が本当の電車で、“かわってる”と思ったトットちゃんが、次に“かわってる”と思ったのは、教室で座る場所だった。前の学校は、誰かさんは、どの机、隣は誰、前は誰、と決まっていた。ところが、この学校は、どこでも、次の日の気分や都合で、毎日、好きなところに座っていいのだった。

そこでトットちゃんは、さんざん考え、そして見回したあげく、朝、トットちゃんの次に教室に入ってきた女の子の隣に座ることに決めた。なぜなら、この子が、長い耳をした兎の絵のついた、ジャンパースカートをはいていたからだだった。

でも、なによりも“かわっていた”のは、この学校の、授業のやりかただった。

普通の学校は、一時間目が国語なら、国語をやって、二時間目が算数なら、算数、という風に、時間割の通りの順番なのだけど、この学校は、まるっきり違っていた。

何しろ、一時間目が始まるときに、その日、一日やる時間割の、全部の科目の問題を、女の先生が、黒板にいっぱい書きちゃって、

「さあ、どれでも好きなものから、始めてください」

といったんだ。だから生徒は、国語であろうと、算数であろうと、自分の好きなものから始めていっこうに、かまわないのだった。だから、作文の好きな子が、作文を書いていると、後ろでは、物理の好きな子が、アルコールランプに火をつけて、フラスコをブクブクやったり、何かを爆発させてる、なんていう光景は、どの教室でもみられることだった。この授業のやり方は、上級になるにしたがって、その子供の興味を持っているもの、興味の持ち方、物の考え方、そして、個性、といったものが、先生に、はっきり分かってくるから、先生にとって、生徒を知る上で、何よりの勉強法だった。

また、生徒にとっても、好きな学科からやっていい、というのは、嬉しいことだったし、嫌いな学科にしても、学校が終わる時間までに、やればいいのだから、何とか、やりくり出来た。従って、自習の形式が多く、いよいよ、分からなくなってくると、先生のところに聞きに行くか、自分の席に先生に来ていただいて、納得の行くまで、教えて

もらう。そして、例題<sup>れいだい</sup>をもらって、また自習<sup>じしゅう</sup>に入る。これは本当<sup>ほんとう</sup>の勉強<sup>べんきょう</sup>だった。だから、先生の<sup>はなし</sup>話<sup>せつめい</sup>や説明<sup>き</sup>を、ボンヤリ聞<sup>き</sup>く、といった事<sup>こと</sup>は、無い<sup>な</sup>にひとしかった。トットちゃん達<sup>たち</sup>、一年生<sup>いちねんせい</sup>は、まだ自習<sup>じしゅう</sup>をするほどの勉強<sup>べんきょう</sup>を始<sup>はじ</sup>めていなかったけど、それでも、自分の好きな科目<sup>かぶく</sup>から勉強<sup>べんきょう</sup>する、ということには、かわりなかった。カタカナを書<sup>か</sup>く子、絵を描<sup>え</sup>く子。本<sup>よ</sup>を読<sup>よ</sup>んでる子。中には、体操<sup>たいそう</sup>をしている子もいた。トットちゃんの隣<sup>となり</sup>の女の子は、もう、ひらがなが書<sup>か</sup>けるらしく、ノートに写<sup>うつ</sup>していた。トットちゃんは、何もかもが珍<sup>めづら</sup>しくて、ワクワクしちゃって、みんなみたいに、すぐ勉強<sup>べんきょう</sup>、というわけにはいかなかった。そんな時<sup>とき</sup>、トットちゃんの後<sup>うし</sup>ろの机<sup>つくえ</sup>の男の子が立ち上<sup>あ</sup>がって、黒板<sup>こくばん</sup>のほうに歩<sup>ある</sup>き出<sup>だ</sup>した。ノートを持<sup>も</sup>って。黒板<sup>こくばん</sup>の横<sup>よこ</sup>の机<sup>つくえ</sup>で、他の子<sup>ほか</sup>に何かを教<sup>おし</sup>えている先生<sup>せいしん</sup>のところに行<sup>い</sup>くらしかった。その子の歩<sup>ある</sup>くのを、後<sup>うし</sup>ろから見たトットちゃんは、それまでキョロキョロしてた動作<sup>どうさ</sup>をピタリと止<sup>と</sup>めて、頬杖<sup>ほおづえ</sup>をつき、ジーっと、その子を見つめた。その子は、歩<sup>ある</sup>くとき、足<sup>ひ</sup>を引きずっていた。とっても、歩<sup>ある</sup>くとき、体<sup>からだ</sup>が揺<sup>ゆ</sup>れた。始<sup>はじ</sup>めは、わざとしているのか、と思<sup>おも</sup>ったくらいだった。でも、やっぱり、わざとじゃなくて、そういう風<sup>かぜ</sup>になっちゃうんだ、と、しばらく見ていたトットちゃんにわ<sup>わ</sup>かった。その子が、自分の机<sup>じぶん つくえ</sup>に戻<sup>もど</sup>ってくるのを、トットちゃんは、さっきの、頬杖<sup>ほおづえ</sup>のまま、見た。目と目が合<sup>あ</sup>った。その男の子は、トットちゃんを見ると、ニコリと笑<sup>わら</sup>った。トットちゃんも、あわてて、ニコリとした。その子が、後<sup>うし</sup>ろの席<sup>せき</sup>に座<sup>すわ</sup>ると、――座<sup>すわ</sup>るのも、他の子<sup>ほか</sup>より、時間<sup>じかん</sup>がかかったんだけど――トットちゃんは、クルリと振<sup>ふ</sup>り向<sup>む</sup>いて、その子に聞<sup>き</sup>いた。「どうして、そんな風<sup>ふう</sup>に歩<sup>ある</sup>くの？」その子は、優<sup>やさ</sup>しい声<sup>こえ</sup>で静<sup>しず</sup>かに答<sup>こた</sup>えた。とても利口<sup>りこう</sup>そうな声<sup>こえ</sup>だった。「僕<sup>ぼく</sup>、小児麻痺<sup>しょうにまひ</sup>なんだ」「しょうにまひ？」トットちゃんは、それまで、そういう言葉<sup>ことば</sup>を聴<sup>き</sup>いたことが無<sup>な</sup>かったから、聞<sup>き</sup>き返<sup>かえ</sup>した。その子は、少し小<sup>すこ</sup>さい声<sup>こえ</sup>でいった。「そう、小児麻痺<sup>しょうにまひ</sup>。足<sup>あし</sup>だけじゃないよ。手<sup>て</sup>だって……」そうい<sup>い</sup>うと、その子は、長<sup>なが</sup>い指<sup>ゆび</sup>と指<sup>ゆび</sup>が、くっついて、曲<sup>ま</sup>がったみたいになっ<sup>な</sup>った手<sup>て</sup>を出<sup>だ</sup>した。トットちゃんは、その左手<sup>ひだりて</sup>を見<sup>み</sup>ながら、「直<sup>なお</sup>らないの？」と心配<sup>しんぱい</sup>になっ<sup>な</sup>って聞<sup>き</sup>いた。その子は、黙<sup>だま</sup>っていた。トットちゃんは、悪<sup>わる</sup>いことを聞<sup>き</sup>いたのかと悲<sup>かな</sup>しくなっ<sup>な</sup>た。すると、その子は、明<sup>あか</sup>るい声<sup>こえ</sup>で言<sup>い</sup>った。「僕<sup>ぼく</sup>の名前<sup>なまえ</sup>は、やまもとやすあき。君<sup>きみ</sup>は？」トットちゃん<sup>は</sup>、その子<sup>こ</sup>が元氣<sup>げんき</sup>な声<sup>こえ</sup>を出<sup>だ</sup>したので、嬉<sup>うれ</sup>しくなっ<sup>な</sup>て、大<sup>おお</sup>きな声<sup>こえ</sup>で言<sup>い</sup>った。「トットちゃん



よ」こうして、山本<sup>やすあき</sup>泰明ちゃんと、トットちゃんのお友達<sup>ともだち</sup>づきあいが始<sup>はじ</sup>まった。電<sup>でん</sup>車<sup>しゃ</sup>の中は、暖<sup>あた</sup>かい日<sup>ひ</sup>差<sup>ざ</sup>しで、暑<sup>あつ</sup>いくらいだった。誰<sup>だれ</sup>かが、窓<sup>まど</sup>を開<sup>ひら</sup>けた。新<sup>あた</sup>しい春<sup>はる</sup>の風<sup>かぜ</sup>が、電<sup>でん</sup>車<sup>しゃ</sup>の中を<sup>とお</sup>通<sup>ぬ</sup>り抜<sup>こ</sup>け、子<sup>こ</sup>供<sup>ども</sup>た<sup>ち</sup>の髪<sup>かみ</sup>の毛<sup>け</sup>が歌<sup>うた</sup>っているように、とびはねた。トットちゃんの、トモエでの第<sup>だい</sup>一<sup>ふ</sup>目<sup>は</sup>は、こ<sup>ふ</sup>んな風<sup>ふう</sup>に始<sup>はじ</sup>まったのだった。

## Chapter10 海のものゝ山のもの

さて、トットちゃんが待ちに待った『海のものゝ山のもの』のお弁当の時間が来た。この『海のものゝ山のもの』って、何か、といえば、それは、校長先生が考えた、お弁当のおかずのことだった。普通なら、お弁当のおかずについて、「子供が好<sup>す</sup>き嫌<sup>きら</sup>いをしないように、工<sup>く</sup>夫<sup>ふう</sup>してください」とか、「栄<sup>えい</sup>養<sup>よう</sup>が、片<sup>か</sup>寄<sup>よ</sup>らないように願<sup>ねが</sup>いします」とか、言うところだけど、校長先生はひとこと、

「海のものゝ山のを持<sup>も</sup>たせてください」

と、子供たちの家<sup>いえ</sup>の人に、頼<sup>たの</sup>んだ、というわけだった。

山は……例<sup>たと</sup>えば、お野菜<sup>やさい</sup>とか、お肉<sup>にく</sup>とか（お肉は山で取<sup>と</sup>れるってわけじゃないけど、大きく分<sup>わ</sup>けると、牛<sup>うし</sup>とか豚<sup>ぶた</sup>とかニワトリとかは、陸<sup>りく</sup>に住<sup>す</sup>んでいるのだから、山のほうに入<sup>い</sup>るって考<sup>かんが</sup>え）、海は、お魚<sup>うみ</sup>とか、佃<sup>さかな</sup>煮<sup>つくだに</sup>とか。この二種<sup>しゅるい</sup>類<sup>かなら</sup>を、必<sup>べん</sup>ず<sup>どう</sup>お弁当のおかずに入れてほしい、というのだった。

（こんなに簡<sup>かん</sup>単<sup>たん</sup>に、必<sup>ひつ</sup>要<sup>よう</sup>なことを表<sup>ひょう</sup>現<sup>げん</sup>できる大人<sup>おとな</sup>は、校<sup>こう</sup>長<sup>ちょう</sup>先生<sup>せんせい</sup>のほかには、そういない）とトットちゃんのマ<sup>う</sup>マは、ひどく感<sup>かん</sup>心<sup>しん</sup>していた。しかも、マ<sup>う</sup>マにとつても、海と山とに、分<sup>わ</sup>けてもらっただけで、お<sup>かんが</sup>ずを考<sup>かんが</sup>えるのが、とつても面<sup>めん</sup>倒<sup>どう</sup>なことじゃなくおも<sup>おも</sup>えてきたから、不<sup>ふ</sup>思<sup>し</sup>議<sup>ぎ</sup>だった。それに校<sup>こう</sup>長<sup>ちょう</sup>先生<sup>せんせい</sup>は、海<sup>うみ</sup>と山といつても、“無<sup>む</sup>理<sup>り</sup>しないこと”“贅<sup>ぜ</sup>沢<sup>たく</sup>しないこと”といつてくださったから、山は“キンピラゴボウと玉<sup>たま</sup>子<sup>ご</sup>焼<sup>やき</sup>”で海は“お<sup>うみ</sup>か<sup>か</sup>”という風<sup>ふう</sup>でよかつたし、もつと簡<sup>かん</sup>単<sup>たん</sup>な海<sup>うみ</sup>と山<sup>れい</sup>を例<sup>れい</sup>にすれば、“お海<sup>の</sup>苔<sup>り</sup>と梅<sup>うめ</sup>干<sup>ぼし</sup>”でよかつたのだ。

そして子供<sup>こども</sup>たちは、トットちゃんが始<sup>はじ</sup>めてみたときに、とつても、う<sup>おも</sup>らやましく思<sup>おも</sup>つたように、お<sup>べん</sup>当<sup>とう</sup>の時間<sup>じかん</sup>に、校<sup>こう</sup>長<sup>ちょう</sup>先生<sup>せんせい</sup>が、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>たちのお<sup>べん</sup>当<sup>とう</sup>箱<sup>ばこ</sup>の中<sup>なか</sup>をのぞいて、  
「海<sup>うみ</sup>のものゝ、山<sup>やま</sup>のものは、あるかい？」

と、ひとりずつ確<sup>たし</sup>かめてくださるのが、嬉<sup>うれ</sup>しかつたし、それから、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>たちも、ど<sup>う</sup>れが海<sup>うみ</sup>で、ど<sup>う</sup>れが山<sup>はっけん</sup>かを発<sup>はっ</sup>見<sup>けん</sup>するの<sup>の</sup>も、ものすごいスリルだった。

でも、たまには、母<sup>は</sup>親<sup>おや</sup>が忙<sup>いそが</sup>しかつたり、あれこれ手<sup>まわ</sup>が回<sup>まわ</sup>らなくて、山<sup>やま</sup>だけだつたり、海<sup>うみ</sup>だけという子<sup>こ</sup>もいた。そういう時<sup>とき</sup>は、どうなるのか、とい<sup>い</sup>え<sup>え</sup>ば、その子<sup>こ</sup>は心<sup>しん</sup>配<sup>ぱい</sup>し

ないでいいのだった。なぜなら、お弁当の中をのぞいて歩く校長先生の後から、白い、割烹前掛けをかけた、校長先生の奥さんが、両手に、おなべをひとつずつ持って、ついて歩いていた。そして先生がどっちか足りないこの前で、

「海!」

というと、奥さんは、海のおなべから、ちくわの煮たのを、二個くらい、お弁当箱のふたに、乗せてくださったし、先生が、

「山!」

といえば、もう片方の、山のおなべから、おいもの煮ころがしが、飛び出す、という風だったから。

こんなわけだったので、どの子供たちも「ちくわが嫌い」なんて、そんなことは、言わなかったし、（誰のおかずが上等で、誰のおかずが、いつも、みっともない）なんて思わなくて、海と山とが揃った、ということが、嬉しくて、お互いに笑いあったり、叫んだりするのだった。

トットちゃんにも、やっと『海のものと山のもの』が、なんだか分かった。そしたら、（ママが、今朝、大急行で作ってくれたお弁当は、大丈夫かな?）と少し心配になった。でも、ふたを取ったとき、トットちゃんが、

「わあーい」

といいそうになって、口お押さえたくらい、それは、それは、ステキなお弁当だった。黄色のいり卵、グリーンピース、茶色のデンプ、ピンク色の、タラコをパラパラに炒ったの、そんな、いろんな色が、お花畑みたいな模様になっていたのだもの。

校長先生は、トットちゃんのを、のぞきこむと、

「きれいだね」

といった。トットちゃんは、嬉しくなって、

「ママは、とっても、おかず上手なの」

といった。校長先生は、

「そうかい」

といってから、茶色のデンプをさして、トットちゃんに、

「これは、<sup>うみ</sup>海かい?山かい?」

と聞いた、トットちゃんは、デンプを、ジーっと見て、

「これは、どっちだろう」

と<sup>かんが</sup>考<sup>いろ</sup>えた。(色からすると、山みたいだけど、だって、土<sup>いろ</sup>みたいな色だからさ。でも……<sup>おも</sup>わかんない) そう思<sup>おも</sup>ったので、

「わかりません」

と<sup>こた</sup>答<sup>こえ</sup>えた。すると、校<sup>こう</sup>長<sup>ちょう</sup>先生は、大きな<sup>こえ</sup>声で、

「デンプは、<sup>うみ</sup>海と山と、どっちだい?」

と、みんなに<sup>き</sup>聞<sup>かんが</sup>いた。ちよ<sup>ま</sup>っと<sup>いっせい</sup>考<sup>かんが</sup>える間があ<sup>ま</sup>って、みんな一<sup>いっせい</sup>斉に、「山!」とか、『<sup>うみ</sup>海!』とか<sup>さけ</sup>叫<sup>き</sup>んで、どっちとも決<sup>き</sup>まらなかった。みんなが<sup>さけ</sup>叫<sup>お</sup>び終<sup>こう</sup>わると、校<sup>こう</sup>長<sup>ちょう</sup>先生は、い<sup>い</sup>った。

「いいかい、デンプは、<sup>うみ</sup>海だよ」

「なんで」

と、<sup>ふと</sup>肥<sup>き</sup>った男の子が<sup>こう</sup>校<sup>ちょう</sup>長<sup>しょう</sup>先生は、<sup>つくえ</sup>机<sup>わ</sup>の<sup>ま</sup>輪<sup>ま</sup>の真<sup>ま</sup>ん中<sup>ちゆう</sup>に立<sup>た</sup>つと、

「デンプは、<sup>さかな</sup>魚<sup>み</sup>の身<sup>こま</sup>をほ<sup>い</sup>ぐして、細<sup>つく</sup>かくして、炒<sup>つく</sup>って作<sup>つく</sup>ったものだからさ」

と<sup>せつめい</sup>説<sup>せつめい</sup>明<sup>めい</sup>した。

「ふーん」

と、みんなは、<sup>かんしん</sup>感<sup>こえ</sup>心<sup>こえ</sup>した声<sup>こえ</sup>を出<sup>だれ</sup>した。そのとき誰<sup>だれ</sup>かが、

「先生、トットちゃんのデンプ、見てもいい?」

と<sup>き</sup>聞<sup>こう</sup>いた。校<sup>こう</sup>長<sup>ちょう</sup>先生が、

「いいよ」

という<sup>い</sup>と、学<sup>がく</sup>校<sup>こう</sup>中<sup>ちゆう</sup>の子<sup>こ</sup>が、ゾロゾロ立<sup>た</sup>ってき<sup>き</sup>て、トットちゃんのデンプを見<sup>み</sup>た。

デンプは<sup>し</sup>知<sup>た</sup>ってて、食<sup>く</sup>べたことはあ<sup>あ</sup>って<sup>い</sup>も、今<sup>いま</sup>の<sup>はなし</sup>話<sup>きゆう</sup>で、急<sup>きゆう</sup>に興<sup>きゆう</sup>味<sup>きゆうみ</sup>が出<sup>で</sup>てきた子<sup>こ</sup>も、  
また、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の家<sup>いえ</sup>のデンプと、トットちゃんのと、<sup>すこ</sup>少<sup>すこ</sup>し、か<sup>か</sup>わ<sup>わ</sup>っているの<sup>おも</sup>かな?と思<sup>おも</sup>って、  
見<sup>み</sup>たい子<sup>こ</sup>も<sup>ちが</sup>い<sup>い</sup>るに違<sup>ちが</sup>い<sup>い</sup>な<sup>い</sup>か<sup>い</sup>った。デンプを見<sup>み</sup>に<sup>き</sup>きた子<sup>こ</sup>の中<sup>ちゆう</sup>には、に<sup>に</sup>お<sup>い</sup>い<sup>い</sup>をか<sup>か</sup>ぐ子<sup>こ</sup>も<sup>い</sup>た  
ので、トットちゃん<sup>は</sup>は、鼻<sup>はな</sup>息<sup>いき</sup>で、デンプが<sup>と</sup>飛<sup>しん</sup>ば<sup>ばい</sup>ないか、と心<sup>しん</sup>配<sup>ぱい</sup>にな<sup>い</sup>った<sup>い</sup>くら<sup>い</sup>だ<sup>い</sup>った。

でも、初<sup>はじ</sup>め<sup>め</sup>てのお<sup>べん</sup>弁<sup>とう</sup>当<sup>じかん</sup>の時<sup>すこ</sup>間<sup>すこ</sup>は、少<sup>すこ</sup>しド<sup>ど</sup>キ<sup>き</sup>ドキ<sup>き</sup>は<sup>は</sup>した<sup>は</sup>けど、楽<sup>たの</sup>しく<sup>うみ</sup>て、『海<sup>うみ</sup>のもの  
と山<sup>かんが</sup>のもの』を<sup>おも</sup>考<sup>おも</sup>えるのも面<sup>おも</sup>白<sup>しろ</sup>いし、デンプが<sup>さかな</sup>お<sup>わ</sup>魚<sup>わ</sup>って分<sup>わ</sup>か<sup>わ</sup>ったし、マ<sup>うみ</sup>マ<sup>うみ</sup>は、『海<sup>うみ</sup>

のものと山のもの』を、ちゃんと入れてくれたし、トットちゃんは、（ぜんぶ、よかったな）と、<sup>うれ</sup>嬉しくなつた。そして、<sup>つぎ</sup>次に、<sup>うれ</sup>嬉しいのは、ママの<sup>べんとう</sup>弁当は、<sup>た</sup>食べると、おいしいことだつた。

## Chapter11 よく噛めよ

で、普通なら、これで、「いただきまーす」になるんだけど、このトモエ学園は、ここで、合唱が入るのが、また、変わっていた。校長先生は、音楽家でもあったから、『お弁当を食べる前に歌う歌』というのを作った。ただし、これは、作曲が、イギリス人で、歌詞だけが、校長先生だった。というより、本当は、もともとあった曲に、先生が替え歌をつけた、というのが、正しいのだけれど。もともとの曲は、あの有名な、『船をこげよ (Row Boat)』ロー ロー ロー ユアー ボート ジェントリー ダウンザ ストゥリーム メリリー メリリー メリリー メリリー ライス イズ バット ア ドリームで、これに校長先生がつけた歌詞は、次のようだった。よく噛めよ たべものを噛めよ 噛めよ 噛めよ 噛めよ たべものを そして、これを歌い終わると、初めて、「いただきまーす」になるのだった。“ロー ロー ロー ユアー ボート”のメロディーに、“よく、噛めよ”は、ぴったりとあった。だから、この学校の卒業生は、ずいぶん大きくなるまで、このメロディーは、お弁当の前の歌う歌だ、と信じていたくらいだった。校長先生は、自分の歯が抜けていたので、この歌を作ったのかもしれないけど、本当は、「よく噛めよ」というより、お食事は、時間をかけて、楽しく、いろんなお話しをしながら、ゆっくり食べるものだ、と、いつも生徒に話していたから、そのことを忘れないように、この歌を作ったのかもしれない。さて、みんなは、大きな声で、この歌を歌うと、「いただきまーす」といって、『海のものと山のもの』に、とりかかった。トットちゃんも、もちろん、同じようにした。講堂は一瞬だけ、静かになった。

## Chapter12 散歩

お弁当の後、みんなと校庭で走り回ったトットちゃんが、電車の教室に戻る  
と、女の先生が、「皆さん、今日は、とてもよく勉強したから、午後は、何をしたい？」  
と聞いた。トットちゃんが、（えーと、私のしたいこと、って言えば……）なんて考える  
より前に、みんなが口々に「散歩!」といった。すると先生は、「じゃ、行きましょう」  
といって立ち上がり、みんなも、電車のドアを開けて、靴を履いて、飛び出した。トッ  
トちゃんも、パパと犬のロッキーと、散歩に行ったことはあるけど、学校で、散歩に行  
く、って知らなかったから、ビックリした。でも、散歩は大好きだから、トットちゃんも、  
急いで靴を履いた。あとで分かったことだけど、先生が朝の一時間目に、その日、一日  
やる時間割の問題を黒板に書いて、みんなが、頑張っ、午前中に、全部やっちゃ  
うと、午後は、たいがい散歩になるのだった。これは一年生でも、六年生でも同じだった。  
学校の門を出ると、女の先生を、真ん中にして、九人の一年生は、小さい川に沿って歩き  
出した。川の両側には、ついこの間まで満開だった、桜の大きい木が、ずーっと並  
んでいた。そして、見渡す限り、菜の花畑だった。今では、川も埋め立てられ、団地や  
お店でギョウズメの自由の丘も、この頃は、ほとんどが畑だった。「お散歩は、九品仏  
よ」と、兎の絵のジャンパー?スカートの、女の子がいった。この子は、“サッコちゃん”  
という名前だった。それからサッコちゃんは、「九品仏の池のそばで、この前、蛇を見  
たわよ」とか、「九品仏のお寺の古い井戸の中に、流れ星が落ちてるんだって」とか教  
えてくれた。みんなは、勝手に、おしゃべりしながら歩いていく。空は青く、蝶々が、  
いっぱい、あっちにも、こっちにも、ヒラヒラしていた。十分くらい歩いたところで、  
女の先生は、足を止めた。そして、黄色い菜の花を指して、「これは、菜の花ね。どう  
して、お花が咲くか、分かる?」といった。そして、それから、メシベとオシベの話をし  
た。生徒は、みんな道にしゃがんで、菜の花を観察した。先生は、蝶々も、花を咲  
かせるお手伝いをしている、といった。本当に、蝶々は、お手伝いをしているらしく、  
忙しそうだった。それから、また先生は歩き出したから、みんなも、観察はおしまい  
にして、立ち上がった。誰かが、「オシベと、アカンベは違うよね」とか、いった。トッ

トちゃんは、(違うんじゃないかなあー!) と思ったけど、よく、わかんなかった。でも、オシベとメシベが大切、ってことは、みんなと同じように、よく分かった。そして、また十分くらい歩くと、見たいもののほうに、キャアキャアいって走っていった。サッコちゃんが、「流れ星の井戸を見に行かない?」といったので、もちろん、トットちゃんは、「うん」といって、サッコちゃんの後について走った。井戸っていっても、石みたいで出来ていて、二人の胸のところくらいまであり、木のふたがしてあった、二人でふたを取って、下をのぞくと中は真っ暗で、よく見ると、コンクリートの固まりか、石の固まりみたいのが入っているだけで、トットちゃんが想像してたみたいな、キラキラ光る星は、どこにも見えなかった。長いこと、頭を井戸の中に突っ込んでいたトットちゃんは、頭を上げると、サッコちゃんに聞いた。「お星さま、見た?」サッコちゃんは、頭を振ると「一度も、ないの」といった。トットちゃんは、どうして光らないか、お考えた。そして、いった。「お星さま、今、寝てるんじゃないの?」サッコちゃんは、大きい目を、もっと大きくしていった。「お星さまって、寝るの?」トットちゃんは、あまり確信が無かったから、早口でいった。「お星さまは、昼間、寝てて、夜、起きて、光るんじゃないか、って思うんだ」それから、みんなで、仁王さまのお腹を見て笑ったり、薄暗いお堂の中の仏さまを、(少し、こわい) と思いながらも、のぞいたり、天狗さまの大きな足跡の残ってる石に、自分の足を乗せて比べてみたり、池の周りを回って、ボートに乗っている人に、「こんにちは」といったり、お墓の周りの、黒いツルツルの、あぶら石を借りて、石蹴りをしたり、もう満足するぐらい、遊んだ。特に、初めてのトットちゃんは、もう興奮して、次から次と、何かを発見しては、叫び声を上げた。春の日差しが、少し傾いた。先生は、「帰りましょう」といって、また、みんな、菜の花と桜の木の間も道を、並んで、学校に向かった。子供たちにとって、自由で、お遊びの時間と見える、この『散歩』が、実は、貴重は、理科か、歴史か、生物の勉強になっているのだ、ということを、子供たちは気がついていなかった。トットちゃんは、もう、すっかり、みんなと友達になっていて、前から、ずーっと一緒にいるような気になっていた。だから、帰り道に「明日も、散歩にしよう!」と、みんなに大きい声で言った。みんなは、とびはねながら、いった。「そうしよう」蝶々は、まだまだ



いそが<sup>いそが</sup>忙<sup>いそが</sup>しそうで、鳥<sup>とり</sup>の<sup>こえ</sup>声<sup>こえ</sup>が、近<sup>ちか</sup>くや遠<sup>とお</sup>くに聞<sup>き</sup>こえていた。トットちゃん<sup>むね</sup>の胸<sup>むね</sup>は、なんか、  
うれしいもので、いっぱいだった。